

大鳥蘭三郎先生を偲ぶ会の報告

一九九六年九月二十三日、台風一過の秋晴れ、彼岸の中日であり、連休という特別の日の午後、「大鳥蘭三郎先生を偲ぶ会」が慶應義塾大学病院新棟十一階の大会議室で開催された。日本医史学会と慶應義塾大学医学部の共催によるものである。大鳥先生が大好きだったベートーベンの第七交響曲の流れる会場には百五十人近い先生の徳を慕う人々が参集し、会場に溢れんばかりになった。司会は私大村敏郎が担当した。

慶應の医学部代表の柳田純一教授（大鳥先生が深く愛してくださった医学部弓道部の部長でもある）の開会の挨拶、蒲原宏日本医史学会理事長の挨拶、慶應義塾大学医学部同窓会「三四会」の伊賀六一会長の挨拶と続き、大鳥先生の御経歴を大村敏郎が披露し、晩年から最期まで主治医だった目黒輝雄先生による経過報告、そしてここで黙禱。

各界代表の思い出に移り、先陣を切って、先輩でもあり医史学会の名誉会員である古川明先生。大鳥先生のライフ・ワークになった研究の場であった日蘭交流史研究会代表の金井圓先生。日本医史学会常任理事の酒井シヅ先生と学会関係が続き、そのあと多彩な趣味やスポーツ関係の話に移った。甲

蘭会という大鳥先生を中心にした会の代表片桐鎮夫先生、慶應義塾全塾の弓術部OB会「弓友会」会長の駒木銀三郎様、医学部弓道部OB会「四矢会」代表の武正建一教授（杏林大学）など。

ここで「大鳥先生のアルバムから」というスライド上映、生後直ぐの可愛い時代から経時的に約五十枚、学問に取り組む真剣な顔から皆に親しまれた独特の笑顔、皆と楽しんだ旅・飲み食いなど映像を通じて大鳥先生を偲んで頂くことができたのではなからうか。解説は大村敏郎が担当した。

そして、御遺族なを夫人の謝辞。宗教色を嫌って、無宗教で葬儀をあげられた先生の遺志をついで、弓道部の学生たちを先導に、慶應義塾の塾歌を斉唱することにした。閉会の辞は弓道部OB会四矢会副会長の渡辺隆夫先生が締め括った。

大鳥先生は人も知る通り、生前の学究生活を「学弓」生活と置き換えても良いくらい弓を愛し、弓道部と共に歩んでくださった。恩返しに弓道部員は先生のご葬儀から偲ぶ会に一生涯命力を注ぎ、大鳥先生の遺徳を讃えて集まってくださった人々に感銘を与えたほどだった。

続いて、献杯の会が同じ階の隣のレストラン別室で行なわれ、友人代表として大鳥先生が卒業後直ぐに入局した理学的診療科（藤浪剛一教授）の同門で後輩の山下久雄名誉教授の発声で杯をあげ、大鳥先生の思い出に浸った。

なお、会場に飾られた大鳥先生の写真は本誌の追悼号に載せたとおり、オランダのオランエ・ナツソウ勲章受賞の時の

ものを使い、まわりは白い花に包まれ、一角の紫色の「蘭」  
がくつきりと浮かぶという簡素だが風格のある先生らしいお  
姿でこれも注目を浴びた。

学会から多くの方々が、中には遠方からお越し頂いた方も  
おられたが、ご協力下さったことを心からお礼申し上げます。

(大村 敏郎)

### 例会記録

九月例会 平成八年九月二十八日(土)

神奈川県医師会館一階ホール

(神奈川県地方会と合同で行われた)

一 横浜軍陣病院の介抱女

中西 淳朗

一 明治二十八年に看護婦が著した

伝染病看護の本について

平尾眞知子

一 ペスト残影 その六

〔医師アンデルナッハについて〕

滝上 正

特別講演「P・F・シーボルトと日本の医学」石山 禎一

十月例会 平成八年十月二十六日(土)

順天堂大学医学部八号館三階会議室

一 「大同類聚方」の問題点―同撰―について 後藤 志朗

一 「医則発揮」の著者河津省庵と門人山川揚庵 石原 昂

一 疾病史から見た『傷寒論』 中村 昭

### お詫びと追加

編集委員会の不手際により、一昨年及び昨年の例会記録が  
未掲載となっております。深くお詫び申しあげますと共に、  
ここに掲載いたします。

十月例会 平成四年十月二十四日(土)

順天堂大学医学部九号館三番教室

一 ミラノ・ラ・グランダ病院一六四二年版

「規則」に就いて

西大條文一

一 わが国最初の義足装着者三世澤村田之助と

義足製作者松本喜三郎

坪井 良子

十一月例会 平成四年十一月二十一日(土)

新宿野村ビル十七階コニカ会議室

(藤浪剛一先生五十年祭)

司 会 慶應義塾大学放射線診断科教授 平松 京一

開 会 慶應義塾大学放射線科教授 橋本 省三

挨 拶 日本医史学会理事 蒲原 宏

挨 拶 慶應義塾大学医学部長 細田 泰弘

御経歴紹介 慶應義塾大学医史学客員教授 大村 敏郎

講 演

一 「兄・藤浪鑑先生のこと」

日本医史学会理事 岡田 靖雄

一 「教室開講と放射線物理学」